人魚《マーメイド》の情報屋

ミーコ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人魚の情報屋

【Ｎコード】
Ｎ１５０７ＢＡ

【作者名】
ミーコ猫

【あらすじ】
ゴミの山に座る一人の少女。表は二つ星ハンター、裏は人魚の情報屋。そんな少女はなんと伝説の人魚とクルタ族のあいだに生まれた子だった！

人魚と観光　2（前書き）

観光篇第2話です。

人魚と観光　2

「こんにちはー！」

笑顔であいさつをする。

相手は黒髪の男性。大きな家を見つけたため、窓ガラスを割って侵入したら出会った。

「えーと…こんにちはー！」

あいさつしてもかえしてくれなかったのでもう一度。

「こんにちはー！

あなたは誰ですかー？」

「君こそ誰？」

おっ！返事くれた。あいさつはないけどね。

「僕名前ないけど？」

「ふーん……。ルカ」

「……ルカ？

あなたの名前？」

「オレの名前はイルミ。ルカは君の名前」

この人は何を言っているんだ？

「名前ないんでしょ？つけてあげた」

「えー…。僕はルカ？」

「そう。ルカ。」

ほう。名前をつけてくれたのか。うん。ルカ、悪くない。

「名前、つけてくれてありがとー！それじゃー」

割った窓ガラスからさっさと外へ出る。名前ももらったし、帰ろーっとっ！……後ろに誰かいるな。後ろを向く。げっ！さっきのイルミが追いかけてきてる。このままじゃ追いつかれるな…仕方ない。

「人魚（マーメイド）の目！」

僕の念能力の一つ人魚（マーメイド）の目を発動させるといっきに走る速さが早くなる。人魚（マーメイド）の目を発動中は目が赤くなり、身体能力が高くなる。

「おっともう最初の大きな門についたやー」

門を軽々と飛び越えて後ろを向くとイルミを振り切ったらしくもういなかった。

人魚と観光　2（後書き）

今回で観光篇は終わりです。次回からはハンター試験篇け入りたいと思います。

人魚とハンター試験　1（前書き）

新しい物語に入ります。

人魚とハンター試験　1

「おー。タマか」

「……師匠ですか」

家へ帰ると何故かハンター協会会長ネテロがいた。

「タマと呼ぶのはやめてください。ルカという名前をもらいました」

「ほう。ルカか。いい名じゃのう」

「…で、なぜ師匠がここにいるんですか？」

「おっ！そうじゃったのう。お主に頼みたいことがあったんじゃ」

師匠からの頼みごと。嫌な予感がする。

「…頼みごととは何ですか？」

「それがのう。今年のハンター試験の監視役をやってもらいたいのじゃが」

「監視役…ですか？」

監視役。

確かプロのハンターがハンター試験の受験者に紛れ込んでこっそりと死者が出ないように、またトラブルが起きた時に対応する役のこと。

「そろそろ、タマにも監視役ぐらいできると思ってのう」

「分かりました。師匠の頼みごとなら仕方が無いので」

「後で危険人物リストを送るからのう」

「分かりまし

た」

「助かるのう。それじゃたのんだぞー」

ネテロは、いつの間にか姿が消えていた。

「ハンター試験かぁ。久しぶりにいくかぁ」

僕は必要なものをかいに街へと出た。

人魚とハンター試験　1（後書き）

いよいよハンター試験が始まります。長くなりますが、ぞうぞお願いします。

ルカ　これから、僕が活躍してくよ！次回もみてね？よろしく～☆

彡

人魚と観光　1（前書き）

今回もよろしくお願いします！

人魚と観光　1

「今日も晴れてるなー！」

「えーと、今日は何しようかな」

のびのびと背伸びをする。今日は雲ひとつない晴れの日。

空を見上げながら僕は考える。

「うーん…そうだ！」

僕は思いついたことを実行するために人魚（マーメイド）の目を発動させる。人魚（マーメイド）の目を発動中は茶色と水色の目が赤くなる。

「さてと、この近くで有名な観光地はどこ？」

僕が質問すると頭の中に情報が流れこんでくる。その中にぴったしあう観光地があった。

「ゾルディック家の住むククルーマウンテン？」

ゾルディック家。有名な殺し屋の一家。ククルーマウンテンに住んでいる。今は有名な観光地。

「へー。面白そうだな。行ってみよ！」

座っていた体を起こし歩き出した。

僕は、表は二つ星ハンター。裏は人魚の情報屋。ただただ情報屋をやっていると人魚の情報屋とよばれていることがわかった。人魚（マーメイド）の目を使って調べたら意外に有名なことがわかった。

膝まで伸びた水色の長い髪に茶色と水色のオッドアイ。頬には紫色に光るウロコ。普段はフードで隠している。可愛いと思う姿の僕。僕と言っているが１１歳の少女である。しかも僕は人魚とクルタ族のハーフで、そのあとは師匠なるハンター協会会長、ネテロに育てられた。師匠のもとから離れて1年がたっている。今の格好は顔が隠れるほど深くかぶれるフード付きの黒いフードコートに動きやすい短パン。かかとのない長くて黒いブーツという格好。長い髪はポニーテールにしている。どこからみても子供だが、フードをかぶって顔を隠している点はあやしい。そんな少女はパドキア共和国にいた。

「うーん、このゾルディックせんべいおいしー！」

ゾルディック家へ行くために観光バスに乗り、途中で買ったゾルディックせんべいを食べている。

『えーまもなく、ゾルディック家前、別名黄泉の門へつきまぁーす』

「あ、つくんだー」

バスガイドの案内音声が流れ、バスが停まる。

「へー。大きい門だなぁー。」

目の前には大きな門が立ちはだかっていた。

「この門、飛び越えてみたいなー・・・ありゃ？」

いつの間にか門を飛び越えていたらしく、あたりは緑が生い茂っていた。

「・・・入っちゃった。・・探検でもしようかなー」

そういい僕は中へと入っていった。

人魚と観光　1（後書き）

作者　次回はゾルディック家が出てきますよ！

ルカ　僕の名前もわかるよ。名付け親はびっくりな人！

次回もみてね！

人魚とハンター試験　2

「おめでとうございます。あなたが一番乗りですよ」
「久しぶりですー。ビーンズさんー」
「お久しぶりです。タマさんは今回監視役でしたよね」
「タマじゃなくてルカです！名前ができました」
タマというのは名前がなかった僕に師匠がつけてくれた名前。猫につける名前なんだって。
「それはそれは！ではこちらでハンター名を変えておきますね」
「お願いします。監視役頑張りますね！」
「まずは頬のウロコを隠してください。「湿布持って来ましたんで」
「かたじけないです」
ビーンズから頬のウロコを隠すための湿布をもらい早速頬にはる。これでウロコはばれないね！
「ルカさんくれぐれも気をつけてください」
「はーい！」
ビーンズから離れて端のほうへ行き座る。ここはハンター試験会場。二つ星のプロハンターの僕だが今回は師匠のネテロに頼まれて監視役に来ている。
今の格好はフード付きの紫色の上着に黒い短パン、膝まである黒いブーツという感じ。膝まで伸びた水色の髪は頭の高い位置でポニーテー

ルにしている。茶色と水色のオッドアイは今日も輝いている。なるべく目立たないようにフードをかぶって隠しているが頬のウロコは湿布をしているから別に顔は隠さなくていいんだけどね…一つ問題があったんだよね。

「2次試験官がメンチとブハラだったなんて…！」

メンチとブハラは僕がまだ小さい頃に何回かあった美食ハンター。合うたびに抱きついてきた思い出がある。

「メンチに抱きつかれたら怪しまれるだろうしなぁ」

抱きつかれませんように！

「よーし！監視役がんばるぞー！」

拳を握りしめてそう言うとうとうとうとと眠りに入っていった。

人魚とハンター試験　3

「んーっ！よく寝たー」

背伸びをしあたりを見渡す。……ほとんど男の人だなー。僕は女だからちょっと変装するかな…。念を顔周りに集中させて…これでオーケー！髪を金色にさせて男の子に変身！年齢は１１歳のままだけど。ん？初めからこうすればメンチにもばれないような…ま、いっか。口調を男の子にしないとね！

「ふーん…意外。子供もうけるんだー」

見渡す限り人人。だが二人だけ子供がいた。

「うー…暇だし声かけてみるかな」

まずは・・・楽しそうなあの黒髪の子供がいる3人組にしよ！

「こんにちはー！」

勢い良くあいさつをする。

「えっと…君は誰？」

「僕はルカ！君たちは？」

「おれはゴン。よろしくねルカ！」

「よろしくなゴン！えっと二人は…」

金髪の人とおっさんの方を向く。

「私はクラピカだ。よろしくルカ」

「おれはレオリオってんだ。よろしくな！」

「クラピカにレオリオもよろしく！」

ほうほう。なかなかいい目をしてるな。クラピカはクルタ族に似てるな…。

「ねぇ。クラピカはもしかしてクルタ族？」

「！！ルカ君もクルタ族なのか！？」

どうしよう。人魚っていって大丈夫かな。悪い人じゃあなさそうだし…。

「正確に言うと人魚とクルタ族のハーフだよ。この茶色の目はクルタ族の眼、水色の方は人魚の眼なんだ」

そう言うと三人ともびっくりしてる。人魚は伝説の種族だしね。

「人魚になれるの！？」

「水を浴びるとなれるよ。人魚になると大変になるんだって」

「すごい！それじゃ「ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ！」

いきなり目覚まし時計のような音が響いた。

「ただいまをもって受付時間をしゅうりょうさせてもらいます」

！サトツさんだ。

「ではこれよりハンター試験を開始します。私についてきてください。それが一次試験です。ではいきますよ」

たたたたたたたたたたたたたたたたたたた

たたたたたった……　全員がサトツさんについていく。

「・・・・・ゴン、僕前の方へ用事があるから行くね！あとで」

ゴン達から離れてサトツさんに話しかける。

「サトツさん！久しぶりですー」

「おや？タマさんじゃないですか。お久しぶりです」

「…ルカです。名前ができました」

「喜ばしい事ですね」

「はい！」

「…変装…ですか？」

「そうです。女の子だとなめられそうなので。それでは！」

サトツさんから離れゴンのところに移動する。

「ただいまー。あれ？そちらは？」

銀髪の男の子がいつの間にいる。

「おれはキルア。お前は？」

「僕はルカ！よろしくな」

「おう。それよりもお前人魚とクルタ族のハーフなんだってな！」

「そうだよ。…あっ！外が見えてきたよ！」

僕はあかりがみえてきたほうを指さす。

「ついたのかな？」

外へ出ると風が吹いていた。そのあと人面ざるが出てきたけどヒソカって人が倒してた。そして今は詐欺師のねぐらを抜けて２次試験会場にいた。

「ゴン大丈夫かなぁ」

「大丈夫だろ」

途中でゴンとはなれてしまって今はキルアといる。

「ならいいんだけど…あっ！ゴンだ」

ゴンとクラピカが走ってきた。…なにかあったな。

「おかえり！大丈夫！？もう少しで２次試験始じ「ガガガガガガガガガガガガガガ」

扉が開いた音がした。見てみるとメンチとブハラがいた。

「ーというわけで次の試験は料理よ！最初は豚の丸焼き！早い者勝ちよ！ほれいったいった！」

というメンチの言葉で全員が森へとダッシュ！

「僕達も行こう！」

ゴンたちといっしょに豚の丸焼きを作る。ぶたはあっさり確保。ブハラのお題はクリア！

「わたしからは寿司よ！」

僕はその一言で自分しかクリアしないことをまだしらなかった。

人魚と2次試験

2次試験のメンチからのお題は寿司。僕は昔にメンチから寿司の作り方を教わっている。だが僕以外ほとんど知らないみたい。

「ゴン達ー寿司知ってるー？」

一応聞いてみる。

「知らないや。ルカは知ってる？」

「知ってるよー。メンチから教わったんだ」

「！メンチさんから！？ルカって何者！？」

「たしかに。強そうだしな」

「（やべっ）それよりも寿司の材料取り「魚ァ！？ここは森だぜ！？」「ばか！声がでかい！川とかあるだろ！」

クラピカとレオリオの声だ。それにしても今のでみんな魚取りに行っちゃったよ。

「僕達も早く行こう！」

ゴンたちと川へ到着。魚をとって会場へ戻る。

「さー作るぞー！」

メンチに教わったように寿司を作ってく。うん！完成。

「ゴンにキルア、ちょっと行ってくる！」

できた寿司をもってメンチのところへと向かう。

「やっほーメンチとブハラ久しぶりー。ほい寿司」

「！あなたもしかしてタマ！？変装だいぶ上達したわね！寿司は…うん！おいしい！合格よ！」

「わーい！じゃあちょっと散歩してくるー」

うん。僕も少しは上達したのかなぁ。料理。

「うーん、ちょっと寝ますかな」

暖かい草の上でよこになり目を閉じて夢へと入っていった。

主人公設定（前書き）

ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲのオリジナル？の小説です。
どうぞよろしくおねがいします。
このページは物語が進むにつれ編集していきます。

主人公設定

主人公設定
名前　ルカ

年齢　１１歳

体重　３０キロ

念能力

人魚の目（マーメイドアイ）　発動中は目が赤くなり、身体能力が高くなる。望めば知りたい情報がわかる。

制約　特になし。

人魚の剣（マーメイドソード）　切りたいと思ったものしか切れない剣。大きさは自由。

制約　使ったあとは1時間ほど使えない。容姿

水に透き通るような水色の膝までのびた髪に茶色と水色のオッドアイ。茶色の目はクルタ族の目、水色の目は人魚の目。人魚とクルタ族のハーフの少女。そのため頬にウロコがある。普段はフードをかぶって隠している。水をあびると人魚になってしまう。人魚のときはクルタ族の父親から受け継いだ茶色の目が緋色になり我を忘れ暴れてしまう。戻るには首にかけている小さな鈴をふるしかない。ちなみにお湯は大丈夫。表は二つ星ハンター。裏は人魚（マーメイド）の情報屋。

主人公設定（後書き）

作者　今回は読んで下さりありがとうございます。
これから物語をすすめるのでぜひ読んでください。
ルカ　よろしくね！

人魚と2次試験　2

「むっ。寝過ぎた！会場へ戻らないと」

僕は急いで会場へ戻る。

「あれ？師匠がいる」

そこには師匠なる会長ネテロがいた。

「ルカ！今からゆで卵を取りに行くんだって」

「あっゴン。ちょっと待って！おいてくなー」

ゴンたちを追いかけ飛行船の中へ入る。

「今からどこいくんだ？」

「あの山だって！」

「おーでかいなぁ」

すぐに飛行船は目的地についた。すぐ近くにあった崖を覗く。

「ひー高いなぁ。落ちたら‥にゃっ！？」

僕はいつの間にか崖に落ちていた。

「師匠だなー！落としたのは！」

怒っている間に途中にあった糸につかまり、大きな卵をついでにとって崖をよじ登り地面に降りる。

「師匠ー！僕を落としたなー！！」

「なんのことじゃ「とぼけてもむだです！」　師匠に飛び蹴りをお見舞いした。これぐらいしないとね！

「次はやらないでくださいね」

「はい」

謝らせると周りの視線に気付いた。

「……やっちゃった♪……

…では！」

走って飛行船の中へ逃げ込む。いやーあやしまれちゃったな…。

「そうだ！変装をとけばいいんじゃん！元に戻れば大丈夫なはずさ！」

早速変身をとき、女の子に戻る。髪は膝まで伸び、水色に戻る。

「これでオーケー！」

こっそりと飛行船から出て混じる。

「ゴン！キルア、クラピカにレオリオ！」

「えーと誰？」

「僕！ルカ！」

「！？ルカは男だぁ！」

「あれは変装！こっちが本当の姿！」

そいい男の姿になりもう一度戻る。いやーそんなに驚くことかね。四人とも驚いてるよ。

「わけがあって！変装してたの」

「会長に師匠っていってたし変装するわ本当になにもんだよお前」

「キルアの意見に賛成だ。君は何か隠してないか？」

「（ぎくっ）な、何も隠してなんかないよ！あっ！みんな飛行船に乗って行くよ。僕達も行こう！」

『あやしー！』

そんなこんなであやしまれたルカだった。

人魚と飛行船（前書き）

つづきです◆

人魚と飛行船

「次の試験会場まで各自自由に時間を使ってください」
「わーい！キルアとルカ探検しにいこう！」
「おう！」
「いくいくー！」
ゴンとキルアと一緒に飛行船の探検に行くことにした。暇だしね。
「わー外が見えるよ！」
「綺麗だね！」
「すごいなー」
外を見ながら話していると後ろから何かを感じて三人とも後ろを向いた。
「どうしたんじゃね？」
「師匠！今の師匠ですね！何のようですか」
「いや、わし暇でのーおぬしらわしとゲームでもせんか？かったらハンターにしてやろう」
「！本当！？ネテロさん！」
「本当じゃよ。やるならついてこい」
「キルアとルカ！どうせ暇なんだしやってみない？」
「俺は別にいいぜ」
「うーん、暇だしいっかな！やる！」
やることに決めた僕はゴンとキルアと一緒にネテロについていった。

「ハーッハーッ！」
「くそっ！」

「そろそろ僕にかわってよー」
ネテロからボールを奪えばいいゲームだがゴンとキルアがチャレンジしてもなかなかとれてなかった。
「ゴンとキルアー！かわってー！」
「うんわかったー」
「一旦任せた！」
「オーケー任せて！」
ゴンとキルアとハイタッチをし、今度は僕が挑戦する。
「師匠行きますよー！」
「ふぉふぉいつでもいいぞい」
「いきます！」
まずはダッシュ！次はキック！次は……
「…キルアあのスピードに追いつける？」
「ぜってーむり！」
「やっぱし？」
僕と師匠はありえない速さで対決をしていた。本気を出すために人魚の目を発動した僕でも師匠には少し劣る。
「ほっ！いい動きじゃ！」
「師匠こそ！」
こんな会話をしながら師匠のボールを狙う。
「疲れた！もーむり！寝る！」
およそ3時間ぐらい師匠と対決すると僕にも限界というものができてくる。
「ルカすごいね！」
「本当にお前なにもんだよ！」
「そのうちわかるって！それよりもおやすみなさい！」
「ここで寝るの！？てっもう寝てるし！！」
「ふぉふぉまぁ寝かせときなさい。子供は寝る子はよく育つというしな」
「それにしてもよく寝てるなー」

キルアがルカの顔を覗き込む。かあああああ！！

「？キルア顔赤いよ。どうかした？」

「！な、なんでもねーよ！おれ先帰ってるな！」

たたたたたたたたたった！

「行っちゃった。どうしたんだろうキルア」

「ふぉふぉ若いってことじゃよ」

「？」

「まぁそのうち分かるじゃろ」

「そうかな？おれも寝よう！ぐー」

「ここで寝るんかい！」

「すーすーすー（ルカ）」

「ぐーかーぐかー（ゴン）」

「……子供じゃのう」

ネテロはそう思ったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1507ba/

人魚《マーメイド》の情報屋

2012年1月6日18時45分発行